

## 〈研究ノート〉

### 古文を通してデューイを読み解くことは可能か —北京女子高等師範学校学生・陳定秀を手掛かりに—

劉幸

広島大学

**概要：**米国教育哲学者ジョン・デューイが北京で「教育哲学」を講義した際、北京女子高等師範学校学生の陳定秀は出席し、古文で講義の内容を詳細に筆録した。この筆録ノートから、彼女の長年の古文訓練と李大釗に代表されるマルクス主義思想に影響を受けたことがうかがえる。デューイ訪中の際、女子高師における学生たちの熱意が高かったが、大学の役員たちは比較的冷たい態度をデューイに示した。デューイの教育理論は中国に普遍的に浸透していると、デューイの弟子である胡適がよく主張しているが、実は、彼が述べたように順調に進んだわけではなく、すべての高等教育機関及び教育関係者はデューイの教育理論を積極的に取り入れたわけではない。

**キーワード：**デューイの中国訪問、北京女子高等師範学校、古文、胡適、李大釗

### *Is John Dewey translatable in Classical Chinese?*

#### *—Focused upon CHEN Dingxiu's Notes—*

*LIU Xing*

*Hiroshima University*

**Abstract:** During John Dewey's visit to China, CHEN Dingxiu, a student at Beijing Female Higher Normal College, attended Dewey's lectures on the Philosophy of Education and made a detailed note in Classical Chinese. Chen's note suggests that she had very good training in Classical Chinese, and her translation of Dewey in a Classical way was also a success. This note also shows that Chen was influenced by her teacher LI Dazhao and had already acquired some basic Marxist concepts, like the class. She actively absorbed Dewey's educational philosophy and made it her ideological guide for her action in the student movement. During Dewey's visit to China, students at Beijing Female Higher Normal College were enthusiastic, but the administration showed a relatively cold attitude. It reflected the complexity within Chinese higher education at that time and the uneven spread of Dewey's educational theory among Chinese higher education institutions.

**Keywords:** Dewey's Chinese Visit, Beijing Female Higher Normal College, Classical Chinese, Hu Shi, Li Dazhao

## はじめに

本稿の目的は、アメリカの教育哲学者ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の教育理論がいかに北京女子高等師範学校で受容されたのか、その受容にはどのような特徴があったのかを、当校の学生陳定秀 (1900-1952) の筆録ノートを手掛かりに、明らかにすることである。

デューイは1919年4月30日から1921年8月2日まで、二年以上中国に滞在し、北京大学、南京高等師範学校、北京高等師範学校を含む諸機関で講演し、各地を訪問して、いわゆる「デューイ潮」を醸成させた。彼の講演は、彼がまた中国に滞在している間に、『杜威在華演講録』(1919)、『杜威五大演講』(1920)として出版され、中国の教育界で大きな反響を呼んでいた。デューイの中国訪問に焦点を当てた学術研究は多数存在する (Keenan 1977; Wang 2008; Peters 2019; 森本 1994; 元 2000; 劉 2021 など)。その多くは、胡適 (1891-1962) をはじめとするデューイのコロンビア大学での弟子たちに焦点を当てたものである。「文学改良芻議」(1917) という名文で、文言文の廃止及び白話文の普及を提唱し、「暴に大名を得た」(山口 2000, p. 12) 胡適は、当時、北京大学の教授を務めていた。デューイの中国訪問の最初の計画者であり、デューイの講演の最も重要な通訳者でもある胡適は、言うまでもなく、デューイの中国訪問における中心的な立役者の一人である。胡適はこの時期も白話文の普及に努力を惜しまず、1919年10月に山西太原で開催された全国教育会連合会で、「国語科」カリキュラムの策定に携わっていた。デューイも、白話文の重要性を十分に認識し、当会の議決を「教育の一大前進に値する」(山下 2020, p. 149) と評価した。胡適は、デューイの講演を白話文の形でわかりやすく翻訳し、デューイの理論の普及に貢献した一方で、胡適の翻訳自体が白話文の一種の模範となったのである。

しかし、当時のデューイの講演が、文言文(古文)で記録された版本も存在したということは先行研究で長い間見過ごされてきた。それは、北京女子高等師範学校の学生・陳定秀が筆録したデューイの「教育哲学」講義である。

1919年9月21日より、デューイは毎週日曜日の朝九時、北京の教育部講堂で、「教育哲学」を講演し、胡適は通訳者を担当した。この講義は合計16回、二回の延期を加え、1920年2月22日に幕を下ろした。これは、デューイが中国に到着してから、最初の体系的な教育学に関する講義であり、その意義は言うまでもない。デューイの講義内容は、教育部の機関誌『教育公報』1919年の第6巻第10号から、翌年の第7巻第6号に連載されていた。筆録者は胡適の北京大学の教え子・孫伏園 (1894-1966) である。この流暢な白話文訳稿は、1920年の『杜威五大演講』で再掲載を得て、中国の教育に多大な影響を与えた。

それに対して、陳定秀の文言文筆録ノートは、女子高師学校誌『北京女子高等師範文芸会刊』のみに掲載され、長い間ほとんど注目されていない。しかし、陳の筆録は、単なる文言文という言語的特性のみならず、胡適などのアメリカ留学を経験した人と距離をとっていた北京女子高等師範学校が如何にデューイの教育哲学を受容したのかを反映した貴重な文献の一つなのである。本論文は、陳定秀の筆録ノートを手掛かりに、北京女子高等師範学校を中心とした「デューイ潮」の浸透の過程を明らかにする。

## 1. 陳定秀とデューイの講演

陳定秀は、江蘇省蘇州昆山陳墓鎮下塘街陳敦和里で由緒ある家柄に生まれた。充実し

た家庭教育を受けて、若い頃から、詩作を公表した。江蘇省立蘇州第二女子師範学校を卒業後、1917年8月、江蘇省教育局から推薦され、北京女子師範学校・国文専修科に入学した。1919年4月、当校は北京女子高等師範学校に昇格され、国文専修科は国文部に改組された。1922年、陳は、同校の初代卒業生及び中国で初代の女子大学生として卒業した（北京師範大学文書館、『1914-1925年女師範及女高師畢業生名冊』）。在学中、陳は「新文化運動」を積極的に参加し、同校の盧隱（1898-1934）、王世瑛（1899-1945）、程俊英（1901-1993）と共に、「四公子」と愛称された。また、陳は、盧隱の小説『海浜故人』の中の登場人物「玲玉」のモデルにもなっている。卒業後、蘇州や上海などの小・中学校で教鞭を執り、1952年に病気でなくなった。

陳は自叙の中で、「適値=星期日-, 余得=逐次聆=其宏論-, 筆以記之.....失=真之處-, 當=所=難=免」（適に日曜日にあつて、余は逐次彼の高論を聴き、筆を以て記いた……失真の處は免れない）（陳 1920, p. 1）と述べた。当時、北京女子高等師範学校は北京市西単の石駙馬大街にあり、西単牌楼にあつた教育部の講堂から歩いて10分ほどしか離れていなかった。そのため、陳はデューイの講義を一度も欠かさず聴くことができた。この筆録は、講演現場の陳によって完成され、一定程度信頼できるテキストである。ただし、陳が使った言語は文言文である。

陳のノートと孫のノートを比較すると、両者の意味は基本的に一緒であることがわかるが、陳のノートは古文であるため、より簡潔である。その冒頭で、孫のノートによると、「なぜ教育が不可欠かという、生と死という二つのことがあるからである。人間は、生まれたときは自立できず、他人に頼らなければならないので、教育というものに依存している。死ぬと、それまでの経験や知識をすべて失う。もし、今まで重ねた経験や知識を教育に通じて子孫に伝えないと、人類にとって、そのコストは大きすぎる。したがって、死という事実そのものが教育を必要とする」（教育所以不可少的緣故就是因為生與死兩件事。人類當生下來的時候不能獨立，必須依靠他人，所以有賴於教育；死去的時候，把生前的一切經驗和知識都丟了，後世子孫倘要去從頭研究，豈非不太經濟，甚至文化或可因此隔絕，所以因為人類有死的一件事，也非有教育把他的經驗和知識傳之子孫不可）（袁剛ら 2004, p. 411）、とデューイが語った。

同じ意味であるが、陳のノートはもっと簡潔である：「教育之必要、實緣=於生死-。人不=能=無=生、生而無=知、則不=下=能=不=藉=教育-以=使=中=之=有=上=知。人不=能=無=死、死而知=能=絶-、則不=下=能=不=藉=教育-以=使=中=布=其生前之知識經驗於後世=上。」（教育の必要は、実は、生死に縁る。人は生の無いことが不能であるが、生まれてから、知も無いし、教育を藉りないと、知識を有ることができない。人は死の無いことが不能であるが、死んだら、知識と能力が絶つ。教育を藉りないと、後世にその知識と経験を布かない。）（陳 1920, p. 1）

日増しに文明が繁栄し、教育が盛んになった、文字も生まれた。しかし、文字は教育の分野でも分断を生み出した。一つは文字による教育であり、もう一つは直接的教育である。陳のノートによると、「自教育別=為=二、而特別階級、遂以構成、凡受=学校教育-者、恒=為=居高臨=下之人-、或=為=貴族-、統=馭政權-、或富豪、傲=倪群倫-。」（教育が別に二つのものに為るから、特別階級は遂に、それを以て構成された。学校教育を受けた者は、恒に高く居る、下に臨む人。あるいは貴族になるか、政權を統馭する、あるいは富豪になるか、群倫を傲睨する。）（同上）

同じ意味であるが、孫の記録文字では少し長くなる：「学校教育の結果、一種の特殊な階級を養成されなければならない。いわゆる讀書者、文人、学者はみなこのような教

育によって養成される。この種の教育は社会とも密接な関係があり、この種の教育を受ける人は三種類しかいない：祭司、牧師、そして教育権を持っていた人たち、そして、権勢のあるひと、即ち、人々を治める人、最後には資産のある人。」（學校教育的結果、必定養成一種特殊階級。所謂讀書人、文人、學者、都是從這種教育養成的。這種教育與旁的社會也很有關係，受這種教育的人大約只有三種：第一，是古時的祭司、牧師、握教育權的人；第二，是有權勢的人，從前所謂治人的人；第三，是有資產的人。）（袁剛ら 2004, p. 413）

それに基づいて、「教育哲学の問題点は三つある：(1)特殊階級の教育をいかにして、平民化、普及化させるか；(2)文字の教育と日常生活の教育の間に、いかにバランスをとるか；(3)いかにして昔の教育の良い部分を残しつつ、現在の環境に適応できる人材を育成していくか。」（教育哲學應該提出來要討論的問題：（一）怎樣可以使特別階級的教育，變成大多數，變成普及；（二）怎樣可以使偏重文字方面的教育與人生日用的教育得一個持平的比例；（三）怎樣可以使守舊的教育一方面能保存古代傳下來的最好的一部分，一方面能養成適應現在環境的人才。）（同上）

陳のノートはほぼ同じ意味である：「教育之哲学問題、于<sub>レ</sub>是尚焉、将<sub>下</sub>何以広<sub>二</sub>其範圍<sub>一</sub>、以消<sub>去</sub>除其特別階級<sub>上</sub>？将<sub>下</sub>何以調<sub>二</sub>和精神與實質<sub>一</sub>、以期<sub>中</sub>均平之發達<sub>上</sub>？将<sub>下</sub>何以傳<sub>二</sub>古化<sub>一</sub>而応<sub>二</sub>新潮<sub>一</sub>、以成<sub>中</sub>与<sub>レ</sub>世有<sub>レ</sub>关之教育<sub>上</sub>？是皆急宜<sub>二</sub>解決<sub>一</sub>者也。」（教育の哲学問題がここにかさねている：何を以て教育の範囲を広め、特別階級を消除するか？何を以てその精神と実質を調和し、均平な發達を期するか？何を以て古来の文化を伝えて、また、新潮に応じて、この世に關与する教育を成すか？それは皆急いで解決すべきものである。）（陳 1920, p. 2）

実際、デューイが北京で語ったこの部分は、基本的に彼の著書『民主主義と教育』（*Democracy and Education*）の第一章「生命に必要なものとしての教育」（Education as a Necessity of Life）を洗練させたものである（Dewey 1985, pp. 4-13）。

紙幅が限られているため、ここで陳のノートと孫のノートの包括的な比較研究を行うことはできないが、読者は両者を比較することができ、デューイの原著と比較することもできる。結論として、デューイが北京の講演で語った内容は『民主主義と教育』からほとんど脱逸していない。陳と孫のノートは基本的にデューイの意味を正確に伝えている。つまり、古文を通してデューイを読み解くことは可能である。

## 2. 筆録間の相違点

ほとんどの場合、この二つのノートの意味は基本的に合致するが、文体の違いにより、やはり、いくつかの相違点がある。両者の最も顕著な違いは、文体にある。文言文の筆録では、同じ内容でも古風に感じられる。

例えば、孫の筆録に見られる「多くの教育者は、乳児期の子供の本能を軽視し、子供が乳児期から一気に大人になるようなことができないのは、残念なことだと考えている。だから、彼らはずも幼児期を短縮し、そして、大人の知識や経験をはめ込もうとしている。然し、乳児期は一切の教育の基礎である」（許多教育者把這個不學而知的本能看得太輕了，以為兒童一定不能由嬰兒一腳跳到成人的階段。所以他們總想把兒童期縮短，將成人的知識經驗硬裝進去。他們以為兒童期是完全白廢的，哪裡知道這是真正的教育基礎）（袁剛ら 2004, p. 420）という旨は、陳の筆録ノートに以下のように展開されている：「世人恒視<sub>二</sub>嬰孩期<sub>一</sub>為<sub>二</sub>人類進化之不<sub>二</sub>經濟時間<sub>一</sub>、致<sub>レ</sub>欲<sub>二</sub>躡等以施<sub>レ</sub>教<sub>一</sub>、以期<sub>二</sub>兒童期之縮短<sub>一</sub>。殊<sub>レ</sub>不知<sub>二</sub>兒童本能之發達<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>一定之時期<sub>一</sub>、若逆<sub>二</sub>其性<sub>一</sub>、將事倍而功半

矣。」（世人は恒に嬰孩期を人類進化の不経済の時間を見なして、等級を飛び越えて、教育を施して、児童期を縮短している。実は、児童本能の発達是一定の時期を経てなければならないことを知らない。これは事倍而功である。）（陳 1920, p. 5）

文言文を使う上で、中国典故の使用は常に避けられない。その場合、デューイ本来の意味から逸脱する表現が幾つかある。例えば、陳は「孟母三遷，可謂深明其理。盖由其无意活動，可為有意活動，而社会生活常識，即由是以輸入也」（「孟母三遷」はその通りである。無意識な活動が意識的な活動に為ることで、社会生活の常識は教えられるようになる。）（同上）と記した。だが、孫の記録には、「孟母三遷」<sup>1</sup>の典故が全く含まれていない。中国文化に全く馴染みのなかったデューイは、「孟母三遷」のような中国の古典を語ることはなかったであろう。これは明らかに、古文の特徴を踏まえて陳が付け加えた文学的表現である。

さらに重要なのは、陳の筆録には、彼女の師匠である、中国初期の共産主義者李大釗（1889-1927）からの影響が垣間見えることである。最も明白な例の一つが、最後の一章にある。孫の筆録では、デューイが「経済はより複雑である。自然の資源を開発して、貧富格差の拡大による階級戦争の惨状を生じた欧米の過ちを繰り返してはいけない」（経済方面更複雑了，要有計劃發展天然富源，免致貧富不均，鬧出階級戰爭的慘狀，蹈歐美的覆轍）（袁剛ら 2004, p. 482）と言ったとされている。しかし、陳の筆録ノートによれば、それは「經濟上則辟天然之利源，平均社会之生活，勿使留不平之階級，如今日之歐洲然」（經濟上は天然の利源をひらき、社会の生活を均さなければならない。今の欧羅巴のような不平等な階級を残すな）（陳 1920, p. 41）と記されている。

そもそもデューイはマルクス主義の階級観を完全には支持していないので、階級の分裂による貧富の格差を社会不安の原因として捉えていたとしても、階級の問題を根絶することを意図してはいない（Dewey 1946, pp.4-5）。したがって、孫の筆録はデューイの本来の意味に近いと判断できる。一方、中国共産党の創立者である李大釗は 1919 年から、北京女子高等師範学校で、マルクス主義に基づき、「社会学」、「フェミニスト運動の歴史」、「倫理学」という三つの科目を開講し、当校の学生に大きな影響を与えた。陳の同級生・程俊英の回想によれば、李大釗は授業で「階級そういうものがなくなり、発達した共産主義が実現した場合にのみ、女性は本当の解放を得ることができる」（Jiang 2018, p. 198）と語ったこともある。李は、常に陳を懇切に指導し、当時、李が監督を担当した新劇『孔雀東南飛』にも陳を出演させた。当時の陳がマルクス主義をどれほど把握できていたかは別の問題であるが、「階級問題」への意識は李大釗の講義で喚起されたに違いない。したがって、陳が「不平等な階級を残すな」と筆録しているのは、無意識のうちに、マルクス主義の影響を露呈したものと考えられる。

### 3. 歴史的な文脈における北京女子高等師範学校とデューイ

陳の筆録を理解するためには、そのテキスト自体の分析にとどまらず、歴史的な文脈に立ち返って、当時の北京女子高等師範学校の教員と学生たちの雰囲気をも十分に理解する必要がある。

北京女子高等師範学校は 1908 年に設立され、中国の近代女子高等教育の原点とも言

<sup>1</sup> 孟子の母が、孟子の教育に環境の悪い影響が及ぶのを避けるため、墓地のそばから市場のそばへ、さらに学校のそばへと三度住居を移した話である。その出典は漢・劉向の『列女伝』である。

える。しかし、中国社会の封建的伝統が強かったため、北京女子高等師範学校は「女子師範・女子中学校教員の養成」を中核機能とし、学校のスタイルは常に保守的であった（崔 2007, p. 240）。当校は、「読経」、「講経」科目を設置し、女教經典のようなものを教えていた。例えば、漢代劉向の『列女伝』、班昭の『女誡』などである。崔（2007, p. 257）によれば、「良妻賢母」という論調の主張は、「前漢の班昭の『女誡』を理論化、体系化したものであった。民国においても、この考え方はかなり残っている。」また、当時当校の教員の多くは日本留学の経験を持ち、明治以降の日本の「良妻賢母」という風潮の影響を受けたことも明らかである。その結果、国内外の影響によって、北京女子高等師範学校の校風は極めて保守的になった。程俊英は、「入学の時、封建的な家族から大学に進学する喜びはあったが、一年間住んでみて、石駙馬大街の学校の赤い建築が嫌いになった。嚴重な門番とか、校長先生の厳しい顔とか、寮の管理者の昼夜を問わずの検査とか、『礼記・内則』を中心にした講義とか、古文の習作とか、すべてが私たち若者の理想と完全に合わず、極端な反感と無限の苦悩を引き起こした」（程 1997, p. 58）と回想している。国文専修科時代の主任戴礼（1880-1934）は、四十歳の女性であり、『礼記・内則』をテキストとして、「男は仕事、女は家庭」の思想と「三従四徳」を常に強調した。文芸訓練も、古文訓読の一点に集中し、白話文の使用は一切禁じられた。したがって、1917年に入学した陳は、デューイの講演を聞いた時、既に二年以上にわたって厳格な古文訓練を受けていた。これが、彼女がデューイの講演を流暢な文言文で筆録できる理由にほかならない。

デューイが中国を訪れる以前は、北京女子高等師範学校の雰囲気には大きな変化は見られなかった。学長方還（1866-1932）は1917年以来、学校の発展に尽力したが、保守的な学風を維持する姿勢を貫いていた。1918年以降、陳中凡（1888-1982）、黄侃（1886-1935）、劉師培（1884-1919）など一流の学問者が、方還の斡旋で、次々と北京女子高等師範学校の教員として招聘されたが、特筆すべきは、彼らがいずれも当時の著名な古文家であったことである。方還は、陳中凡に宛てた招聘書の中で、陳に、『春秋左傳』、『尚書』『説文解字』の講義を囑託し、学生たちの学問不足を補うことを特に強調している（吳新雷ら 2001, p. 546）。

しかし、1919年5月以降、デューイの中国訪問に伴い、「五四運動」に代表される様々な学生運動が盛り上がりを見せるようになった。特に、1919年の後半から、李大釗と胡適は北京女子高等師範学校の非常勤講師として来校、「新文学」を提唱し、新鮮な雰囲気をもたらし、また、北京女子高等師範学校の役員たちに大きなプレッシャーをもたらした。当時の学生の一部は、デューイの説く民主主義と教育の関係こそが、学生運動の理論的な礎になると考えていた（劉、施 2022, p. 132）。当時、デューイの講演を聴くことは教育界の風潮の一つであった。北京女子高等師範学校は教育事業に直接関与したため、デューイ夫妻を女子高師に招かざるを得なかったが、方還は学生の風潮を抑えるため、いくつかの制限を暗黙のうちに課しようと考えていた。胡適はペンネームで1919年7月6日に公表したし新聞記事「方還とデューイ夫人」の中で、以下のように学長方還を揶揄した：

「北京女子高等師範学校の学長方還は先月、デューイ博士の妻アリスにスピーチを依頼した。デューイ夫人が学校に到着したとき、彼は通訳者を通じて、デューイ夫人に『今日のスピーチで、学生に従順の意識を教えるように頼むぞ』と言った。デューイ夫人は学長に耳を傾けて、その後、『それは私の講演の旨と正反対です』と答えた。方学長は愚かすぎる。新教育の思想を恐れているので、わざわざデューイ夫人を誘うことは

皮肉なものだ。」(天風 1919)

胡適の文章からわかるように、学長の方還は、女子高師の人材像として「良妻賢母」を期待して、「従順の意識」を要望していた。それはデューイの教育哲学とは大きく違っていることは言うまでもない。女子高師の役員は、明らかに学校の保守的な気風を維持したいと考えていたのである。

しかし、五四運動の波が、すぐに北京女子高等師範学校に及んだ。当時のある新聞で、方還は「今回の学生愛国運動に積極的に参加しないのみならず、逆運動を醸造し、民主的な活動を弾圧し、学生たちの不満をもたらした」(佚名 1919)と批判された。当時の北京女子高等師範学校の学生たちは、五四運動の波に乗り、「倒方運動」(方還学長を倒す運動)を取り込んだ。「倒方運動」の圧力を受け、教育部は最終的に1919年7月28日に方還の辞令を発表した(Jiang 2018, p.149)。その後継者は毛邦偉(1873-1928)であるが、わずか一年後の1920年9月1日、毛邦偉は辞任した。その後任者は教育部の官僚・熊崇煦(1873-1960)であったが、熊は一年間のみ働き、1921年10月8日に辞任した。言い換えると、1919年から1921年にかけて、デューイが中国にいた間、北京女子高等師範学校の行政運営が不安定を極めていたのである。

女子高師の三人の学長は、いずれも保守的だった。方還には留学経験が無く、また、毛邦偉は東京高等師範学校に留学し、熊崇煦は早稲田大学師範部に留学し、当時の風雲児胡適などの米国留学生派とは友好ではなかった。日本の女子教育は「良妻賢母」を重視していたので、毛と熊の二人は少なからずその影響を受けたようである。当時の中国教育界における、デューイの理論に基づき、学生の「学び」をより重視し、「教授法」から「教学法」への転換が広く注目されていたが、毛邦偉はそれにもかかわらず、大瀬甚太郎(1866-1944)の「教授法」の概念を提唱し、学界の主流とはかなり離れていた(毛邦偉 1919)。また、毛邦偉の指示で、女子高師の校則管理はもっと一層厳しくなった。学生の髪型についてさえ、具体的な規定が作られた。例えば、1920年、学生の許羨蘇(1901-1986)は、髪が短いために、学校から締め出された。魯迅(1881-1936)は、小説『髪物語』(頭髮的故事)を書き、毛邦偉自身の髪が細いにもかかわらず、女子学生の髪にも干渉した、と述べた(魯迅 1973, pp.48-53)。熊は官僚出身なので、一年間の在任中、大した実績は基本的になかった。言い換えれば、デューイの中国滞在中、三人の女子高師の学長は、いずれも、デューイが強調した「民主」や「自治」などの概念に対して、非常に冷淡な反応をしていた。

この意味で、陳定秀がデューイの講演を聞くために教育部に行くことは、孫伏園の場合とは根本的な違いがあった。北京大学の学生としての孫は、胡適の全面的な支持を得ていたが、北京女子高等師範学校の学生としての陳定秀は、女子高師当局の支持を全然得ていなかったのである。しかし、デューイの講演から、彼女は大きな精神的な支援を得た。陳の筆録ノートから見れば、デューイは何度も聴衆に学生自治の重要性を訴えた:「今学校之管理恒不<sub>レ</sub>明乎此<sub>一</sub>, 以<sub>レ</sub>管理<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>高臨<sub>レ</sub>下之事<sub>一</sub>, 對<sub>レ</sub>於学生<sub>一</sub>, 存<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>之而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之之心<sub>一</sub>, 至<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>压迫<sub>一</sub>手段<sub>一</sub>, 馴<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>侵犯<sub>一</sub>犯学生之自由<sub>一</sub>, 是誠大謬。」(今の学校の管理者は恒にこれを知らない、管理を君臨することを見なし、「民は使うべし、教えるべからず」という思想に基づき、学生に対応している。まさかに、压迫の手段を以て、学生の自由を侵犯することに至る。これは大きなまちがいである。)(陳 1920, p.12)これは、女子高師の学生が「倒方運動」に参加する精神的な原動力の一つであるといっても過言ではない。

陳と方は蘇州の同郷であるが、方が辞任した後、陳は方に対して好意を一切示さなか

った。程俊英の回想によると、方が女子高師の学長を辞職して蘇州に帰った時、人々にその辞職の理由を尋ねられたが、方は答えられなかった。それに対して、陳は冷笑した（程 1987, p. 76）。方に対する、学生たちの態度がうかがえる。中国の 1920 年代は学生運動の時代である。「デューイは中国の若者たちの精神的な指導者である... 当時、変化が鈍い中国の現実社会では、当然、多くの紛争が生じていた。国民党の元老胡漢民氏は、中国の学生がデューイ教育哲学の影響を受けてから、学生運動に参加した、という認識を私に示したことがある」（蔣 2012, p. 133）と、蔣夢麟（1886-1964）は語った。胡漢民（1879-1936）のこの考え方は、陳定秀にデューイからの影響があったことを裏付ける。

陳は長年にわたる古文の訓練に基づき、文言文の形でデューイの講演を筆録し、そして、彼の理論を理解していたのである。また、その中には、マルクス主義的な思想の要素も含まれていた。しかし、文言文を通じて、彼女はデューイの思想の旨を把握し、その後の学生運動で自身の行動指針にすることができた。

### おわりに

胡適は、新しい言語的な変化は、新しい思想の導入と密接に関係していると常に考えていた（潘 2018, pp. 61-63）。中国におけるデューイ教育哲学の普及は、胡適の理論で理解するならば、まさに新思想（プラグマティズム）と新言語（白話文）の二重の勝利であった。過去の研究でも、両者は統合されていたというのが一般的な見解である。しかし、陳の筆録ノートは、歴史のより複雑な側面を反映している。デューイの思想は、たんに「胡適-白話文」というルートによって、中国の教育界に浸透したわけではない。

伝統的な環境で育てられた陳定秀に代表される女子大学生は、長年にわたり正統な古文訓練を受けており、デューイの理論を受容した際に、表現ツールとしての文言文の駆使を必要とした。たしかに、白話文は強く提唱されたが、すでに培われた習慣は、しばらくの間、変更することはできなかった。陳の筆録は最も伝統的な文言文で書かれているが、時代の新しい雰囲気にも満ちている。すなわち、李大釗の影響を受け入れ、マルクス主義の「階級」の概念とデューイの教育哲学が混在することで、新旧の思想が相同居している点に歴史的意義が認められるのである。これはある意味「誤解」とも言えるが、この「誤解」はまさに陳定秀に代表される当時の女子大学生が古文の世界から脱却し、西洋の思想を積極的に吸収していた一面を表している。これらの西洋の思想はほぼ同時期に中国に導入されたため、それを吸収する際には混沌とした一面は免れない。

また、デューイの理論を受容した過程で、北京女子高等師範学校には、学生の熱意と校長の冷淡が対照的に見られるという特有の現象が生じていたというユニークな現象があった。デューイの教育理論が中国に普遍的に浸透していると胡適はたびたび公表したが、実のところ、その浸透は彼が言ったように順調に進んだわけではなく、すべての高等教育機関及び教育関係者がデューイの教育理論を積極的に取り入れたわけでもない。加えて、北京女子高等師範学校の学生は、時代潮流の影響を受けて、デューイの講演を積極的に聴取した。実際に、デューイの理論は女子高師学生運動の理論上の指針となった。デューイの教育哲学は、その本質は海外から輸入された思想の一種であるが、以上の経過の通り、北京女子高等師範学校の多くの学生のイデオロギーと行動に直接影響し、最終的には同校の発展史に大きな影響を残した。



## 参考文献

- 北京師範大学文書館, 『1914-1925年女師範及女高師畢業生名冊』, 請求番号: 2-0007-0001.
- 陳定秀, 「教育哲学: 杜威博士演講」『北京女子高等師範文芸会刊』第1卷第2号, pp.1-40, 1920.
- 程俊英, 「回憶盧隱二三事」『新文学史料』1987年第1期, pp.76-85, 1987.
- 程俊英, 「回憶女師大」『檔案与史学』1997年第1期, pp.58-61, 1997.
- 崔淑芬, 『中国女子教育史: 古代から一九四八年まで』中国書店, 2007.
- Dewey, J. *The Public and Its Problems: An Essay in Political Inquiry*. Chicago: Gateway Books. (1946).
- Dewey, John. *The Middle Works of John Dewey, Volume 9, 1899-1924: Democracy and Education*. Southern Illinois University Press. (1985).
- 蔣夢麟, 『西潮与新潮』人民出版社, 2012.
- Jiang, L. *Educational Memory of Chinese Female Intellectuals in Early 20th Century*. Singapore: Springer. (2018).
- Keenan, B. *The Dewey Experiment in China: Political Power in the Early Republic*. Cambridge: Council on East Asian Studies Harvard University. (1977).
- Liu, X. A Seed Found Its Ground: John Dewey and the Construction of the Department of Education at Beijing Normal University. *Beijing International Review of Education*, Vol. 1, No.4, pp.695-713, (2019).
- 劉幸, 「デューイの中国経験再考: 南イリノイ大学所蔵資料に基づいて」『創価教育』第14号, pp.13-24, 2021.
- 劉幸、施克燦, 「在激進与保守之間: 論杜威在華的角色轉換」『清華大学教育研究』第43卷第2号, pp.131-138, 2022.
- 魯迅, 『吶喊』人民文学出版社, 1973.
- 毛邦偉, 「教授法講義」『教育公報』第6卷第6期, pp.1-11, 1919.
- 森本正一, 「日中の比較教育論: デューイの影響を中心に」『佛教大学教育学部論集』第5号, pp.51-71, 1994.
- 潘光哲, 『胡適全集: 胡適時論集2』中央研究院近代史研究所, 2018.
- Peters, M. 100 Years of Dewey in China, 1919-1921 A Reassessment. *Beijing International Review of Education*, Vol. 1, No.1, pp.9-26, (2019).
- 天風, 「方選与杜威夫人」『每週評論』, 第29期, 1919年7月6日.
- Wang, J. C. *John Dewey in China: To Teach and to Learn*. New York: State University of New York Press. (2008).
- 吳新雷、姚科夫、梁淑安、陳杰, 『清暉山館友聲集: 陳中凡友朋書札』江蘇古籍出版社, 2001.
- 山口栄, 『胡適思想の研究』言叢社, 2000.
- 山下大喜, 「胡適と国語教育改革—中国近代における『国語科』の創成—」『教育学研究』第87卷, 第4号, pp.609-620, 2020.
- 佚名, 「北京学潮之余波」『民国日報』, 1919年7月23日.
- 元青, 『杜威与中国』人民出版社, 2000.
- 袁剛、孫家祥、任丙強, 『民治主義与現代社会: 杜威在華講演集』北京大学出版社, 2004.

本研究は中国全国教育科学规划教育部青年課題「杜威来華新見史料の整理与研究」(EOA220549) 科研費の助成を受けたものです。広島大学大学院人間社会科学研究所吉岡佑馬氏には、古文の訓読について有益な助言をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。